第 4 章

シュリー・ナーラダの降誕

第 1 節

व्यास उवाच

इति ब्रुवाणं संस्तूय मुनीनां दीर्घसत्रिणाम् ।
वृद्धः कुलपतिः सूतं बह्वृचः शौनकोऽब्रवीत् ॥ १ ॥

ヴャーサ　ウヴァーチャ
vyāsa uvāca

イティ　ブルヴァーナンム　サンムストゥーヤ
iti bruvāṇaṁ saṁstūya

ムニーナーンム　ディールガハ・サトゥリナーム
munīnāṁ dīrgha-satriṇām

ヴリッダハハ　クラ・パティヒ　スータンム
vṛddhaḥ kula-patiḥ sūtaṁ

バフヴリチャハ　シャウナコー　ブラヴィートゥ
bahvṛcaḥ śaunako 'bravīt

vyāsaḥ—ヴャーサデーヴァ; *uvāca*—言った; *iti*—そのように; *bruvāṇam*—語る; *saṁstūya*—祝っている; *munīnām*—偉大な聖者達の; *dīrgha*—長期の; *satriṇām*—儀式の執行をしている人々の; *vṛddhaḥ*—年長の; *kula-patiḥ*—会合の筆頭者; *sūtam*—スータ・ゴースヴァーミーに; *bahu-ṛcaḥ*—博学な; *śaunakaḥ*—シャウナカという名の; *abravīt*—呼びかけた。

スータ・ゴースヴァーミーがそのように語るのを聞いたあと、長期にわたってその儀式を執行するリシたちの長老で聡明な指導者であるシャウナカ・ムニが、次のように謝辞を述べてスータ・ゴースヴァーミーを讃えた。

要旨解説

学識者の集会の席上、講演者に祝辞や謝辞を述べる人の資格として、聴衆の筆頭者であること、年長者であること、その人物も広い学識をそなえていること、などが挙げられます。シュリー・シャウナカ・リシはこの資格をすべてそなえていた人物であり、スータ・ゴースヴァー

ミーが、「『シュリーマド・バーガヴァタム』をシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーから聞き、内容を理解し、それをそのまま語りたい」と述べたことを聞き、起立して祝辞を述べました。個人的な悟りとは、先代のアーチャーリャ（*ācārya*）をさしおいて、虚栄心から学識をひけらかすことではありません。先代のアーチャーリャに絶大な信念をいだき、主題を適切に把握し、その主題を、ふさわしい手順を踏んで特定の状況に応じて述べる必要があります。*原文の意図を変えないことが鉄則です。*あいまいな言いまわしは極力避けるべきであり、聴衆が理解できるように、また同時にかれらの関心を引きだすような表現で描写しなくてはなりません。これが悟りというものです。集会のリーダーであるシャウナカは、シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが*yathādhītam*（ヤターディータン）と*yathā-mati*（ヤター・マティ）という言葉を使っただけで、この人物の資質を理解し、無上の喜びを感じながら祝辞を述べました。博識な人々は、根源のアーチャーリャを代表していない者の話を聞く気はありません。『シュリーマド・バーガヴァタム』が２度目に語られようとしていたこの集会では、話者も聴衆も正しい質をそなえていました。それが『シュリーマド・バーガヴァタム』を語るときの基本条件であり、その条件が整ってこそ正しい目的が確実に達成されます。その条件が整わなければ、『シュリーマド・バーガヴァタム』の本質を無視した気持ちでこの書物を学んでも、話者と聴衆は無駄骨を折るだけです。

第２節

शौनक उवाच

सूत सूत महाभाग वद नो वदतां वर ।
कथां भागवतीं पुण्यां यदाह भगवाञ्छुकः ॥ २ ॥

シャウナカ　ウヴァーチャ
śaunaka uvāca

スータ　スータ　マハー・バハーガ
sūta sūta mahā-bhāga

ヴァダ　ノー　ヴァダターンム　ヴァラ
vada no vadatāṁ vara

カタハーンム　バハーガヴァティーンム　プニャーンム
kathāṁ bhāgavatīṁ puṇyāṁ

ヤドゥ　アーハ　バハガヴァーン　チュカハ
yad āha bhagavāñ chukaḥ

śaunakaḥ—シャウナカ; *uvāca*—言った; *sūta sūta*—おお、スータ・ゴースヴァーミーよ; *mahā-bhāga*—もっとも幸運な人物; *vada*—どうか話しください; *naḥ*—私達に; *vadatām*—話すことのできる人々; *vara*—尊敬に値する; *kathām*—情報; *bhāgavatīm*—『シュリーマド・バーガヴァタム』の; *puṇyām*—敬虔な; *yat*—であるもの; *āha*—言った; *bhagavān*—非常に力のある; *śukaḥ*—シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー。

シャウナカが言った。「スータ・ゴースヴァーミー様。あなたは、語って唱えることのできる人々のなかでもっとも幸運で尊いお方です。 どうか、偉大で精神的力みなぎる聖者シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーが語った『シュリーマド・バーガヴァタム』の崇高な教えを私たちにお話しください。」

要旨解説

スータ・ゴースヴァーミーはこの節でシャウナカ・ゴースヴァーミーに２度名前を呼ばれています。これはシャウナカや集まった聖者たちが、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られた『シュリーマド・バーガヴァタム』の聖句を聞きたいと熱望していたからです。自分勝手な意図で解釈する偽者から話を聞くつもりはありませんでした。ほとんどの場合、『シュリーマド・バーガヴァタム』を朗読する人々は、それを稼業にする職業吟唱家だったり、至高者の個人としての崇高な活動の境地に入りこめない学識だけの非人格論者だったりします。そのような非人格論者は非人格論的な見解を支えようと、『シュリーマド・バーガヴァタム』の真意を歪曲させますし、職業吟唱家はいきなり第10編に入り、もっとも秘奥な箇所である主の崇高な娯楽をまちがって説明しようとします。どちらも『シュリーマド・バーガヴァタム』の正しい語り手ではありません。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーの足跡に従って『シュリーマド・バーガヴァタム』を語ろうとする人物だけが、あるいはシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーやその代表者から聞く心構えの人物だけが、『シュリーマド・バーガヴァタム』を語りあう超越的な集会の正しい参加者です。

第３節

कस्मिन् युगे प्रवृत्तेयं स्थाने वा केन हेतुना ।
कुतः सञ्चोदितः कृष्णः कृतवान् संहितां मुनिः ॥ ३ ॥

カスミン　ユゲー　プラヴリッテーヤンム
kasmin yuge pravṛtteyaṁ

スタハーネー　ヴァー　ケーナ　ヘートゥナー
sthāne vā kena hetunā

クタハ　サンチョーディタハ　クリシュナハ
kutaḥ sañcoditaḥ kṛṣṇaḥ

クリタヴァーン　サンムヒターンム　ムニヒ
kṛtavān saṁhitāṁ muniḥ

kasmin—どの中で; *yuge*—時代; *pravṛttā*—始まった; *iyam*—この; *sthāne*—場所で; *vā*—あるいは; *kena*—何について; *hetunā*—根拠; *kutaḥ*—どこから; *sañcoditaḥ*—着想を得た; *kṛṣṇaḥ*—クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ・ヴャーサ; *kṛtavān*—編纂した; *saṁhitām*—ヴェーダ経典; *muniḥ*—識者。

どの時代に、どの場所で、そしてなぜこの話は始まったのでしょうか。偉大な聖者クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ・ヴャーサは、どこからこの文献を編纂する着想を得たのでしょうか。

要旨解説

『シュリーマド・バーガヴァタム』はシュリーラ・ヴャーサデーヴァが著わした特別の書物であることから、聡明なシャウナカ・ムニから多くの質問が出されました。列席した聖者たちは、理解力に欠ける女性やシュードラや再誕者家系の堕落した者たちのために、シュリーラ・ヴャーサデーヴァが『マハーバーラタ』を含むさまざまな手段をとおしてヴェーダの聖句を説明したことを知っていました。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、世俗的なものとはいっさい関係がないため、かれらにとって超越的な文献です。ですから、これらの質問はひじょうに知的で適切であると言えます。

第 4 節

तस्य पुत्रो महायोगी समदृङ् निर्विकल्पकः ।
एकान्तमतिरुन्निद्रो गूढो मूढ इवेयते ॥ ४ ॥

タッシャ　プトゥロー　マハー・ヨーギー
tasya putro mahā-yogī

サマ・ドゥリン　ニルヴィカルパカハ
sama-dṛṅ nirvikalpakaḥ

エーカーンタ・マティル　ウンニドゥロー
ekānta-matir unnidro

グードホー　ムーダハ　イヴェーヤテー
gūḍho mūḍha iveyate

tasya—彼の; *putraḥ*—息子; *mahā-yogī*—偉大な献愛者; *sama-dṛk*—公正な視野の; *nirvikalpakaḥ*—徹底した一元論者; *ekānta-matiḥ*—一元論に、あるいは心の調和に固定した; *unnidraḥ*—無知を超えた; *gūḍhaḥ*—表われていない; *mūḍhaḥ*—発達障害の; *iva*—のように; *iyate*—〜のように見える。

ヴャーサデーヴァのご子息は偉大な献愛者であり、心はつねに一元論に没頭していました。俗界の暮らしを超越した方でしたが、尊さはその表情から伺えないため、知恵遅れの人間に見えました。

要旨解説

シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは解放を達成した魂であったため、幻想の力に惑わされないよう自ら警戒することを怠りませんでした。『バガヴァッド・ギーター』では、このような警戒心について明確に説明されています。解放された魂と条件づけられた魂はそれぞれ異なった仕事をします。解放された魂はいつでも精神的な道を歩いていますが、それは条件づけられた魂の目には夢としか見えません。解放された魂がほんとうはどのようなことをしているのか想像さえできないのです。かれらが精神的な活動をただの夢物語と考えるいっぽう、解放した魂は目覚めています。同じように、条件づけられた魂がしていることは、解放した魂にとっては夢でしかありません。条件づけられた魂も解放された魂も同じ境地にいるように見えますが、じっさいはそれぞれ別のことをしているだけであり、向けられる対象が感覚満足であろうと自己の悟りであろうと、両者の集中心は目覚めています。条件づけられた魂は物質に没頭し、解放した魂は物質にまったく関心がありません。この違いが次の節で述べられています。

第５節

दृष्ट्वानुयान्तमृषिमात्मजमप्यनग्नं
देव्यो हिया परिदधुर्न सुतस्य चित्रम् ।
तद्वीक्ष्य पृच्छति मुनौ जगदुस्तवास्ति
स्त्रीपुम्भिदा न तु सुतस्य विविक्तदृष्टेः ॥ ५ ॥

ドゥリシュトゥヴァーヌヤーンタンム　リシンム　アートゥマジャンム　アピ　アナグナンム
dṛṣṭvānuyāntam ṛṣim ātmajam apy anagnaṁ

デーヴョー　フリヤー　パリダドゥル　ナ　スタッシャ　チトゥランム
devyo hriyā paridadhur na sutasya citram

タドゥ　ヴィークッシャ　プリッチャティ　ムナウ　ジャガドゥス　タヴァースティ
tad vīkṣya pṛcchati munau jagadus tavāsti

ストゥリー・プンム・ビェダー　ナ　トゥ　スタッシャ　ヴィヴィクタ・ドゥリシュテーヘ
strī-pum-bhidā na tu sutasya vivikta-dṛṣṭeḥ

dṛṣṭvā—見ることで; *anuyāntam*—追っている; *ṛṣim*—その聖者; *ātmajam*—彼の子ども; *api*—〜にもかかわらず; *anagnam*—裸ではない; *devyaḥ*—美しい乙女達; *hriyā*—恥じらう気持ちで; *paridadhuḥ*—体を隠した; *na*—ではない; *sutasya*—息子の; *citram*—驚いて; *tat vīkṣya*—それを見ることで; *pṛcchati*—尋ねている; *munau*—そのムニ（ヴャーサ）に; *jagaduḥ*—答えた; *tava*—あなたの; *asti*—ある; *strī-pum*—男性と女性; *bhidā*—違い; *na*—ではない; *tu*—しかし; *sutasya*—息子の; *vivikta*—純粋で; *dṛṣṭeḥ*—見つめる者の。

我が子の後を追っていたシュリー・ヴャーサデーヴァが、裸で沐浴していた美しい乙女たちの近くをとおりすぎたとき、ヴャーサデーヴァ自身は裸ではなかったのに、乙女たちは衣服で体を隠しました。しかし、さきほど我が子が同じ場所をとおったときには体を隠すことはありませんでした。聖者がその理由を尋ねると、乙女たちは、「あなたのご子息は心が純粋無垢で、私たちを見る目に男女を区別する様子はなかった、しかしあなたは区別する目で見ていた」と答えました。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第５章・第18節）では、博識な聖者は、学者・紳士的なブラーフマナ・チャンダーラ（犬を食べる者）・犬・牛などを精神的な目で平等に見つめる、と述べられています。シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはその境地に入っていた人物です。そのため、男性女性という見方をせず、すべての生物の体を異なる衣服として見ていました。沐浴していた女性たちは、表情を見るだけで男性の心を見抜くことができました。幼い子を見れば、その無邪気さがわかるようなものです。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは16歳という若者であり、身体も充分成長していました。裸で歩いていたし、女性たちも裸でした。しかしシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは性的な関係を超越した人物だったため、その表情には穢れのない無邪気さが漂っていました。女性たちにも特別な眼力があり、かれの境地

をすぐに見抜いたため、その挙動には頓着しませんでした。ところが、父親がとおりかかると、女性たちはすぐに衣服で身を隠しました。かれには子どもか孫ほどの女性たちだったのですが、それでもヴャーサデーヴァに対して社会の慣習として反応しました。ヴャーサデーヴァが世帯者だったからです。世帯者は男性と女性の区別をつけるべきであり、それができなければ世帯者にはなれません。ですから、男性・女性に対する執着心を持つことなく、肉体と魂の違いを知るよう努力する必要があります。男女の区別をしているのであれば、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーのようなサンニャーシーになるべきではありません。少なくとも知識として、生命体は男性でも女性でもないことを確信すべきです。外側の衣服は物質自然が作った物質でできており、その目的は、異性を引きつけて魂を物質存在にしばりつづけることにあります。解放された魂は、この歪められた区別意識を超えた境地にいます。どのような生物でも体で区別して見ることはありません。すべては同じ、すべては同じ精神魂、という境地です。この精神的な視野という完成境地が解放であり、シュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはその境地に到達していました。シュリーラ・ヴャーサデーヴァも超越的な境地に立脚した人物でしたが、世帯者として暮らしていたために慣習に従い、解放した魂のふりはしませんでした。

第６節

कथमालक्षितः पौरैः सम्प्राप्तः कुरुजाङ्गलान् ।
उन्मत्तमूकजडवद्विचरन् गजसाह्वये ॥ ६ ॥

カタハンム　アーラクシタハ　パウライヒ
katham ālakṣitaḥ pauraiḥ

サンプラープタハ　クル・ジャーンガラーン
samprāptaḥ kuru-jāṅgalān

ウンマッタ・ムーカ・ジャダヴァドゥ
unmatta-mūka-jaḍavad

ヴィチャラン　ガジャ・サーフヴァイェー
vicaran gaja-sāhvaye

katham—どのように; *ālakṣitaḥ*—認められて; *pauraiḥ*—市民によって; *samprāptaḥ*—辿り着いて; *kuru-jāṅgalān*—クル・ジャーンガラ地方; *unmatta*—狂っている; *mūka*—口のきけない; *jaḍavat*—発達障害; *vicaran*—さまよっている; *gaja-sāhvaye*—ハスティナープラ。

この聖者（ヴャーサの子、シュリーラ・シュカデーヴァ）が、あたかも狂人で、口のきけない、知恵遅れのような風采でクルとジャーンガラ地方をさまよい、そしてハスティナープラ（現

在のデリー）の都市に入ったとき、市民たちの目にかれをどのように映ったのでしょうか。

要旨解説

現在のデリー市は、ハスティー王によって築かれたため、以前はハスティナープラ（Hastināpura）という名前で知られていました。ゴースヴァーミー・シュカデーヴァは、父親の家を出たあと狂人のように放浪していたため、市民には、かれが気高い境地にいることを看破するのは難しかったはずです。ゆえに、聖者かどうかは見た目ではなく、話を聞いて判断しなくてはなりません。サードゥ（*sādhu*）あるいは偉大な聖者には、見るためではなく、聞くために近づくべきです。サードゥの話を聞かなければ、得られるものはなりもありません。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、主の超越的な活動について話すことのできるサードゥでした。凡人たちの気まぐれを満たすような人物ではありません。『シュリーマド・バーガヴァタム』を語ってはじめてその高貴さが認められたのであり、奇術師の手品を見せたわけではありません。風采は知恵遅れの、口のきけない、狂人に見えても、じつはもっとも高尚で超越的な人物だったのです。

第７節

कथं वा पाण्डवेयस्य राजर्षेर्मुनिना सह ।
संवादः समभूत्तात यत्रैषा सात्वती श्रुतिः ॥ ७ ॥

カタハンム　ヴァー　パーンダヴェーヤッシャ
kathaṁ vā pāṇḍaveyasya

ラージャルシェール　ムニナー　サハ
rājarṣer muninā saha

サムヴァーダハ　サマブァートゥ　ターター
saṁvādaḥ samabhūt tāta

ヤトゥライシャー　サートゥヴァティー　シュルティヒ
yatraiṣā sātvatī śrutiḥ

katham—なぜそうなのか; *vā*—もまた; *pāṇḍaveyasya*—パーンドゥの子孫（パリークシット）; *rājarṣeḥ*—聖者でもあった王の; *muninā*—そのムニと; *saha*—とともに; *saṁvādaḥ*—話しあい; *samabhūt*—起こった; *tāta*—おお、最愛の方よ; *yatra*—そうすると; *eṣā*—このような; *sātvatī*—超越的; *śrutiḥ*—ヴェーダの真髄。

パリークシット王がこの偉大な聖者に会い、ヴェーダの超越的真髄の書（『シュリーマド・バーガヴァタム』）がかれに向けて謳われるようになった背後に、どのようないきさつがあったのでしょうか。

要旨解説

この節で『シュリーマド・バーガヴァタム』は「ヴェーダの真髄」と述べられています。その内容は、なんの権威もない者たちが考えるような想像上の物語ではありません。この本は『シュカ・サムヒター』とも呼ばれますが、それは偉大で解放された聖者、シュリー・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーによって語られたヴェーダ聖歌だからです。

第８節

स गोदोहनमात्रं हि गृहेषु गृहमेधिनाम् ।
अवेक्षते महाभागस्तीर्थीकुर्वंस्तदाश्रमम् ॥ ८ ॥

サ　ゴー・ドーハナ・マートゥランム　ヒ
sa go-dohana-mātraṁ hi

グリヘーシュ　グリハ・メーディナーンム
gṛheṣu gṛha-medhinām

アヴェークシャテー　マハー・バハーガス
avekṣate mahā-bhāgas

ティールティー・クルヴァンムス　タドゥ　アーシュラマンム
tīrthī-kurvaṁs tad āśramam

saḥ—彼（シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー）; *go-dohana-mātram*—牛の乳が搾られる時間だけ; *hi*—確かに; *gṛheṣu*—家の中に; *gṛha-medhinām*—世帯者達の; *avekṣate*—待っている; *mahā-bhāgaḥ*—もっとも幸運な; *tīrthī*—巡礼; *kurvan*—変化させる; *tat āśramam*—その家。

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、世帯者の家のまえで、牛の乳が搾られる時間だけとどまっていた。その家を清めるためだけに。

要旨解説

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはパリークシット皇帝に出会い、『シュリーマド・バー

ガヴァタム』の聖句を語りました。そして世帯者を（牛の乳を搾る時間に）訪ねても、その幸運な世帯者から布施を受けとるだけで、30分以上とどまることはありませんでした。吉兆な聖者の訪問によってその家は清められるからです。ゆえにシュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、超越的な境地に立脚した理想的な布教徒です。私たちはその活動から、「放棄階級として神の言葉を布教する使命に命を賭けた人々は、超越的知識で啓発する以外に世帯者との関係はない」ということを学ばなくてはなりません。世帯者に寄付を乞う行為は、その家を神聖にするためにおこなわれるものです。放棄階級者は、世帯者が持つ財産という魅力に惑わされ、かれらにへつらうようになってはいけません。放棄階級者がそのような状態に陥るのは、毒を飲んだり、自殺をしたりすることよりも危険なことです。

第９節

अभिमन्युसुतं सूत प्राहुर्भागवतोत्तमम् ।
तस्य जन्म महाश्चर्यं कर्माणि च गृणीहि नः ॥ ९ ॥

アビヒマニュ・スタンム　スータ
abhimanyu-sutaṁ sūta

プラーフル　バハーガヴァトーッタマンム
prāhur bhāgavatottamam

タッシャ　ジャンマ　マハーシュチャリャンム
tasya janma mahāścaryaṁ

カルマーニ　チャ　グリニーヒ　ナハ
karmāṇi ca gṛṇīhi naḥ

abhimanyu-sutam—アビマニュの子; *sūta*—おお、スータ様; *prāhuḥ*—〜であると言われている; *bhāgavata-uttamam*—主の一流の献愛者; *tasya*—彼の; *janma*—誕生; *mahā-āścaryam*—非常に素晴らしい; *karmāṇi*—行ない; *ca*—そして; *gṛṇīhi*—どうか話してください; *naḥ*—私達に。

マハーラージャ・パリークシットは、主の一流の献愛者といわれ、その誕生と行動はどれも素晴らしいものです。どうか、パリークシット皇帝についてお話しください。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは素晴らしい誕生をしています。母親の胎内にいたときに、

人格主神シュリー・クリシュナに守られたからです。また、牛を殺そうとしていたカリを懲罰するなど、素晴らしい行動もしめしています。牛を殺すことは人類文化の終焉です。皇帝は、恐ろしい罪の権化によって殺されかけていた牛を守りたかったのでした。またその死も栄光に輝いています。死ぬ定めにある生物にとっては衝撃的な「死の予告」を受け、ガンジス川の岸辺に座り、主の超越的な活動について聞きながら他界の時を待ったからです。『シュリーマド・バーガヴァタム』について聞いていたあいだ、食べることも飲むこともなく、一瞬たりとも眠ることはありませんでした。このように、マハーラージャ・パリークシットにまつわるすべてが素晴らしく、その行動も傾聴するに値するものです。この節には、皇帝について詳細に聞こうとする願いが表現されています。

第１０節

स सम्राट् कस्य वा हेतोः पाण्डूनां मानवर्धनः ।
प्रायोपविष्टो गङ्गायामनादृत्याधिराट्श्रियम् ॥ १० ॥

サ　サンムラートゥ　カッシャ　ヴァー　ヘートーホ
sa samrāṭ kasya vā hetoḥ

パーンドゥーナーンム　マーナ　・ヴァルダハナハ
pāṇḍūnāṁ māna-vardhanaḥ

プラーヨーパヴィシュトー　ガンガーヤーンム
prāyopaviṣṭo gaṅgāyām

アナードゥリテャーデヒィラートゥ・シュリヤンム
anādṛtyādhirāṭ-śriyam

saḥ—彼; *samrāṭ*—その皇帝; *kasya*—なんのために; *vā*—あるいは; *hetoḥ*—理由; *pāṇḍūnām*—パーンドゥの子息達の; *māna-vardhanaḥ*—家族を豊かにする者; *prāya-upaviṣṭaḥ*—座り、絶食している; *gaṅgāyām*—ガンジス川の岸辺で; *anādṛtya*—捨てて; *adhirāṭ*—獲得した王国; *śriyam*—富。

マハーラージャ・パリークシットは偉大な皇帝であり、王国を獲得し、あらゆる富に恵まれていました。また高尚な人格者だったことから、パーンドゥ王家の影響力を高めていました。そのようなかれがすべてを捨ててガンジス川の岸辺に座り、死ぬまで絶食するとは、いったいどのような事情があったのでしょうか。

要旨解説

マハーラージャ・パリークシットは全世界と内外の海を治めていた皇帝ですが、自ら苦労して王国を得たわけではありません。祖父のマハーラージャ・ユディシュティラとその兄弟たちから国を受け継ぎました。そのことに加え、巧みな行政を展開したかれは、祖先たちの名声にふさわしい人物でした。ですから、その王国で富と統治を脅かすようなことはいっさい起こりませんでした。では、なぜこのような順風満帆の環境を捨てて、ガンジス川の岸辺に座って、死ぬまで絶食をつづけたのでしょうか。これはじつに驚くべきことであり、集まった聖者たちはそのわけを知りたいと思いました。

第１１節

नमन्ति यत्पादनिकेतमात्मनः
शिवाय हानीय धनानि शत्रवः ।
कथं स वीरः श्रियमङ्ग दुस्त्यजां
युवैषतोत्स्रष्टुमहो सहासुभिः ॥ ११ ॥

ナマンティ　ヤトゥ・パーダ・ニケータンム　アートゥマナハ
namanti yat-pāda-niketam ātmanaḥ

シヴァーヤ　ハーニーヤ　ダハナーニ　シャトゥラヴァハ
śivāya hānīya dhanāni śatravaḥ

カタハンム　サ　ヴィーラハ　シュリヤンム　アンガ　ドゥステャジャーン
kathaṁ sa vīraḥ śriyam aṅga dustyajāṁ

ユヴァイシャトートゥスラストゥン　アホー　サハースビヒヒ
yuvaiṣatotsraṣṭum aho sahāsubhiḥ

namanti—ひれ伏す; *yat-pāda*—その人物の足; *niketam*—の下に; *ātmanaḥ*—自分の; *śivāya*—福利; *hānīya*—もたらしていた; *dhanāni*—富; *śatravaḥ*—敵; *katham*—どの理由で; *saḥ*—彼; *vīraḥ*—騎士道; *śriyam*—富; *aṅga*—おお、スータ・ゴースヴァーミー; *dustyajām*—打ち勝てない; *yuvā*—若さあふれた; *aiṣata*—望んだ; *utsraṣṭum*—捨てること; *aho*—感嘆; *saha*—～と共に; *asubhiḥ*—命。

マハーラージャ・パリークシットがあまりに偉大な皇帝であることから、敵たちはこぞってその足もとにひれふし、かれら自身の恩恵のために富を献上するほどでした。若さと力にみな

ぎり、だれも太刀打ちできない王としての富貴をそなえていました。なぜこのような人物が、命はおろか、すべてを捨てたいと願ったのでしょうか。

要旨解説

皇帝の生活に不吉な物事は少しもありませんでした。若々しい青年として、権勢と富を謳歌していました。ですから、このような活気あふれる生活を捨てる理由があるわけがないのです。税の徴収にしても、皇帝のあまりの威勢と高潔な騎士道ゆえに、敵将自ら参上してかれの足もとにひれふし、自分たちの恩恵のために貢物を献上していたほどです。また篤い信仰心の持ち主でもありました。敵をことごとく征圧していたため、王国は繁栄をきわめ、あふれるばかりの牛乳、穀物、金属が蓄えられ、あらゆる川や山に豊かな富がみなぎっていました。物質的にはあらゆる面で満たされていた人物でした。ですから、自分の王国と命を捨てる理由があろうはずがありません。ではなぜ、と、聖者はその理由を知りたいと願いました。

第１２節

शिवाय लोकस्य भवाय भूतये
य उत्तमश्लोकपरायणा जनाः ।
जीवन्ति नात्मार्थमसौ पराश्रयं
मुमोच निर्विद्य कुतः कलेवरम् ॥ १२ ॥

シヴァーヤ　ローカッシャ　バハヴァーヤ　ブゥータイェー
śivāya lokasya bhavāya bhūtaye

ヤ　ウッタマ・シュローカ・パラーヤナー　ジャナーハ
ya uttama-śloka-parāyaṇā janāḥ

ジーヴァンティ　ナートゥマールタハンム　アサウ　パラーシュラヤンム
jīvanti nātmārtham asau parāśrayaṁ

ムモーチャ　ニルヴィデャ　クタハ　カレーヴァランム
mumoca nirvidya kutaḥ kalevaram

śivāya—福利; *lokasya*—すべての生命体; *bhavāya*—繁栄のために; *bhūtaye*—経済発展のために; *ye*—〜である者; *uttama-śloka-parāyaṇāḥ*—人格主神に身を委ねている; *janāḥ*—人々; *jīvanti*—生きる; *na*—しかしそうではない; *ātma-artham*—自分の関心事; *asau*—その; *para-āśrayam*—他人を守るもの; *mumoca*—捨てた; *nirvidya*—なにものにも執着していな

い; *kutaḥ*—どの理由のために; *kalevaram*—人間の体。

人格主神に身をゆだねている人々は、大衆の福利、発展、幸福のために生きるものです。自分だけの興味のために生きようとはしません。ではなぜ、世俗の所有物にはまったく執着していなかったパリークシット皇帝は、人々が頼りにしていたその体を捨てることができたのでしょうか。

要旨解説

パリークシット・マハーラージャは主の献愛者でしたから、理想の王、理想の世帯者でした。献愛者になれば、優れた質をすべて自然にそなえるものです。皇帝はその典型的な人物で、所有していた世俗の財産にはまったく執着していませんでした。しかし、国民のあらゆる面において幸福を守る王であったことから、現世でも来世でもかれらが幸福に暮らせるよう寸暇を惜しんで働いていました。牛を殺すことも認めませんでした。ある生き物は守っても別の生き物は殺す、という卑劣で不公平な政治家ではなかったのです。主の献愛者でしたから、人間・動物・植物など、どのような生き物の幸福でもかなえられる適切な行政を熟知していた人物です。自分中心ではなかった、ということです。利己心とは、自分、あるいは自分の周囲への関心を指しています。パリークシット王ははそのどちらでもありませんでした。ただただ、至高の真理者、人格主神を喜ばせることしか考えていなかったのです。 王は至高主の代表者ですから、抱く興味は至高主の興味と合致していなくてはなりません。至高主は、すべての生命体が主に従順になり、幸せになってほしいと願っています。ですから王の興味も、国民を神の国に導くことに向けられています。そしてかれらも、ふるさとに、神のもとに帰っていけるよう、王と行動を共にしなくてはなりません。主の代表者である王に守られている国には富が満ちあふれています。当時、人々に動物を食べる習慣はありませんでした。穀物・牛乳・くだもの・野菜など、食糧はいくらでもあり、人間も動物も何不自由なく食べていました。食べ物や住居のことで生物すべてが満足していれば、そして定められた規則に従っていれば、生物たちのあいだにトラブルは起こりません。パリークシット皇帝は王にふさわしい優れた質を持つ人物だったからこそ、国内のだれもが幸せに暮らしていたのです。

第１３節

तत्सर्वं नः समाचक्ष्व पृष्टो यदिह किञ्चन ।
मन्ये त्वां विषये वाचां स्नातमन्यत्र छान्दसात् ॥ १३ ॥

タトゥ　サルヴァンム　ナハ　サマーチャクシュヴァ
tat sarvaṁ naḥ samācakṣva

プリシュトー ヤドゥ　イハ　キンチャナ
pṛṣṭo yad iha kiñcana

マニェー　トゥヴァーンム　ヴィシャイェー　ヴァーチャーンム
manye tvāṁ viṣaye vācāṁ

スナータンム　アニャトゥラ　チャーンダサートゥ
snātam anyatra chāndasāt

tat—その; *sarvam*—すべて; *naḥ*—私達に; *samācakṣva*—明確に説明する; *pṛṣṭaḥ*—質問した; *yat iha*—ここで; *kiñcana*—すべて; *manye*—私達は考える; *tvām*—あなた; *viṣaye*—すべての主題について; *vācām*—言葉の意味; *snātam*—熟知している; *anyatra*—〜以外; *chāndasāt*—ヴェーダの部分。

私たちは存じております、あなたがヴェーダの一部を除いて、どのような主題でも的確に意味を把握されているからこそ、私たちのいまの質問すべてについて明確に説明してくださることを。

要旨解説

ヴェーダとプラーナの違いは、ブラーフマナとパリヴラージャカーチャーリャの違いに似ています。ブラーフマナは、ヴェーダで述べられている結果中心の儀式を執行する職務を持っていますが、パリヴラージャカーチャーリャ（博識な布教徒）には、超越的知識をすべての人々に伝える義務があります。ですから、儀式を執行するブラーフマナが系統的に学んでいる発音や韻律のヴェーダマントラをパリヴラージャカーチャーリャが正しく唱えられるとはかぎりません。しかしだからといって、布教のために巡礼する献愛者よりもブラーフマナが重要であると考えるべきではありません。双方とも「同時に同じで違う」立場にいます。同じ最終目的に向かって違った道を歩いている、ということです。

ヴェーダのマントラとプラーナやイティハーサ（*Itihāsa*）で述べられていることに違いはありません。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによると、『マーデャンディナ・シュルティ』では、すべてのヴェーダ（サーマ、アタルヴァ、リグ、ヤジュル、プラーナ、イティハーサ、ウパニシャッドなど）は、至高の生物の呼吸から作りだされた、と述べられています。唯一の違いは、ヴェーダマントラは、ほとんどプラナヴァ・オームカーラ（*praṇava oṁkāra*）

から始まり、特有の音律発音の練習が必要だとされている点です。しかしそれは、『シュリーマド・バーガヴァタム』はヴェーダのマントラよりも重要ではない、ということではありません。先に述べたように、『バーガヴァタム』はすべてのヴェーダの熟した果実です。さらに、もっとも完璧な解放の境地に達したシュリーラ・シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、すでに自己を悟っていた人物だったにもかかわらず、『バーガヴァタム』の研究に没頭しました。シュリーラ・スータ・ゴースヴァーミーもその足跡に従っていますから、たとえヴェーダのマントラの発音が巧みではないとしても、低い境地にいるわけではありません。ヴェーダのマントラはじっさいの悟りよりも、韻律発音の練習に重点が置かれています。オウムのようにただ言葉を口にすることよりも、悟りのほうが重要なのです。

第１４節

सूत उवाच
द्वापरे समनुप्राप्ते तृतीये युगपर्यये ।
जातः पराशराद्योगी वासव्यां कलया हरेः ॥ १४ ॥

スータ　ウヴァーチャ
sūta uvāca

ドゥヴァーパレー　サマヌプラープテー
dvāpare samanuprāpte

トゥリティーイェー　ユガ・パリャイェー
tṛtīye yuga-paryaye

ジャータハ　パラーシャラード　ヨーギー
jātaḥ parāśarād yogī

ヴァーサヴァーンム　カラヤー　ハレーヘ
vāsavyāṁ kalayā hareḥ

sūtaḥ—スータ・ゴースヴァーミー; *uvāca*—言った; *dvāpare*—２番目の時代に; *samanuprāpte*—～の到来に; *tṛtīye*—３番目; *yuga*—時代; *paryaye*—の代わりに; *jātaḥ*—もうけられた; *parāśarāt*—パラーシャラによって; *yogī*—その偉大な聖者; *vāsavyām*—ヴァスの娘の胎内に; *kalayā*—完全部分体の中に; *hareḥ*—人格主神の。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「２番目の時代が３番目の創造期と重なったとき、夫パラーシャラと妻サテャヴァティー（ヴァスの娘）とのあいだに偉大な聖者（ヴャーサデーヴァ）が誕生した。

要旨解説

サテャ、ドゥヴァーパラ、トゥレーター、カリという４つの創造期は順番に到来します。しかし、これらの時代が重なることがあります。ヴァイヴァスヴァタ・マヌの統治期において、４時代の28周期目に時代が重なり、３番目の時代が２番目の創造期より先に現われました。その時代に主シュリー・クリシュナも降誕し、この特異な状態のために修正が為されています。この大聖者の母はヴァス（漁師）の娘のサテャヴァティーで、父は偉大なパラーシャラ・ムニでした。これがヴャーサデーヴァの誕生の由来です。各創造期は３つの時期に分けられますが、その時期をサンデャー（*sandhyā*）といいます。ヴャーサデーヴァは、この時代の３番目のサンデャー時期に降誕しました。

第１５節

स कदाचित्सरस्वत्या उपस्पृश्य जलं शुचिः ।
विविक्त एक आसीन उदिते रविमण्डले ॥ १५ ॥

サ　カダーチトゥ　サラスヴァテャー
sa kadācit sarasvatyā

ウパスプリッシャ　ジャランム　シュチヒ
upaspṛśya jalaṁ śuciḥ

ヴィヴィクタ　エーカ　アーシーナ
vivikta eka āsīna

ウディテー　ラヴィ・マンダレー
udite ravi-maṇḍale

saḥ—彼; *kadācit*—ある時; *sarasvatyāḥ*—サラスヴァティー川の岸辺で; *upaspṛśya*—朝の沐浴を終えた後; *jalam*—水; *śuciḥ*—清められて; *vivikte*—集中; *ekaḥ*—一人で; *āsīnaḥ*—そのように座って; *udite*—昇って; *ravi-maṇḍale*—太陽の。

昔、ヴャーサデーヴァは、日の出とともにサラスヴァティー川で朝の沐浴をし、一人座して瞑想に入った。

要旨解説

サラスヴァティー川はヒマラヤ山脈のバダリカーシュラマ一帯を流れています。つまり、こ

の節で言われている場所は、シュリー・ヴャーサデーヴァが住んでいたバダリカーシュラマのシャミャープラーサを指しています。

第１６節

परावरज्ञः स ऋषिः कालेनाव्यक्तरंहसा ।
युगधर्मव्यतिकरं प्राप्तं भुवि युगे युगे ॥ १६ ॥

パラーヴァラ・ギャハ　サ　リシヒ
parāvara-jñaḥ sa ṛṣiḥ

カーレーナーヴャクタ・ランムハサー
kālenāvyakta-raṁhasā

ユガ・ダハルマ・ヴャティカランム
yuga-dharma-vyatikaraṁ

プラープタンム　ブッヴィ　ユゲー　ユゲー
prāptaṁ bhuvi yuge yuge

para-avara—過去と未来; *jñaḥ*—知っている者; *saḥ*—彼; *ṛṣiḥ*—ヴャーサデーヴァ; *kālena*—時の流れにおいて; *avyakta*—未現の; *raṁhasā*—大きな力で; *yuga-dharma*—時代によって機能する; *vyatikaram*—異変; *prāptam*—生じて; *bhuvi*—地上に; *yuge yuge*—様々な時代。

大聖者ヴャーサデーヴァは、その時代の義務の異変に気づいた。これは、時代の変遷によって生じる目に見えない力が原因であり、地上でさまざまな時代に起こる。

要旨解説

ヴャーサデーヴァのような偉大な聖者は解放を達成した魂であり、過去も未来も明確に見ることができます。ゆえに、カリ時代に起こる異変を見てとったかれは、一般の人々が、闇につつまれた現代で高尚な生活ができるよう対策を考えました。カリ時代の大衆は、はかない物質的なことに興味を持ちすぎています。無知ゆえに、人生の貴重さを判断できず、精神的知識によって啓発されずにいるのです。

第１７－１８節

भौतिकानां च भावानां शक्तिहासं च तत्कृतम् ।
अश्रद्दधानान्निःसत्त्वान्दुर्मेधान् हसितायुषः ॥ १७ ॥
दुर्भगांश्च जनान् वीक्ष्य मुनिर्दिव्येन चक्षुषा ।
सर्ववर्णाश्रमाणां यद्दध्यौ हितममोघदृक् ॥ १८ ॥

バハウティカーナーンム　チャ　バハーヴァーナーンム
bhautikānāṁ ca bhāvānāṁ

シャクティ・フラーサンム　チャ　タトゥ・クリタンム
śakti-hrāsaṁ ca tat-kṛtam

アシュラッダダハーナーン　ニッサットゥヴァーン
aśraddadhānān niḥsattvān

ドゥルメーダハーン　フラシターユシャハ
durmedhān hrasitāyuṣaḥ

ドゥルバハガーンムシャ　チャ　ジャナーン　ヴィークッシャ
durbhagāṁś ca janān vīkṣya

ムニル　ディヴェーナ　チャクシュシャー
munir divyena cakṣuṣā

サルヴァ・ヴァルナーシュラマーナーンム　ヤドゥ
sarva-varṇāśramāṇāṁ yad

ダデャウ　ヒタンム　アモーガハ・ドゥリク
dadhyau hitam amogha-dṛk

bhautikānām ca—物体で作られているものすべても; *bhāvānām*—活動; *śakti-hrāsam ca*—そして、自然の力の減少; *tat-kṛtam*—それによって与えられる; *aśraddadhānān*—不信心な人々の; *niḥsattvān*—徳の欠如による短気; *durmedhān*—物分りの悪い; *hrasita*—減少して; *āyuṣaḥ*—寿命の; *durbhagān ca*—不運な人々も; *janān*—一般大衆; *vīkṣya*—見ることで; *muniḥ*—そのムニ; *divyena*—超越的な質によって; *cakṣuṣā*—視力; *sarva*—すべて; *varṇa-āśramāṇām*—地位と生活階級すべての; *yat*—であるもの; *dadhyau*—熟考した; *hitam*—福利; *amogha-dṛk*—知識を充分身につけた人物。

知識を充分に身につけたその偉大な聖者は、超越的な視力をとおして、物質すべてが時代の影響をうけて劣化していくことを見ることができた。さらに、信仰心をなくした大衆の寿命は

短くなり、美徳の精神を失うために人々が短気になることも予見した。ゆえに、社会の地位や階級すべての人々の幸福を深く思いめぐらしたのである。

要旨解説

目に見えない時の力は強烈で、やがてそれはあらゆる物体を忘却のかなたへ遠ざけていきます。４時代周期の最後のカリ・ユガでは、すべての物質の力は時の影響を受けて衰えていきます。現代では、人々の寿命はきわめて短くなり、記憶力もかなり弱まっています。物体の動きにも活気が失われつつあります。大地は、他の時代に比べて食糧の生産力を落とし、乳牛たちは以前に比べてミルクもそれほど出さなくなりました。野菜やくだものの生産量も少なくなっています。この影響で、人間を含むすべての生物たちも滋養のある食べ物が食べられなくなっています。生活に必要な多くの物品が不足していることから人の寿命も短くなり、記憶力の減退、知性の貧弱化、偽善にまみれた人とのつきあいなど、さまざまな兆候を見ることができます。

偉大な聖者ヴャーサデーヴァは、超越的な視力をとおしてこの状態を予見できました。占星術師が人の未来を見通すことができるように、あるいは天文学者が日食や月食の予知ができるように、解放された魂たちは、経典をとおして全人類の未来を予言できます。このような人々は、達成した精神的な資質という鋭い視力によって未来を遠望できるのです。

そして当然、このような超越主義者は主の献愛者ですが、一般の人々にために福利活動をしたいといつも考えています。かれらこそ大衆の真の友であり、５分先に何がおこるかもわからない現代の大衆指導者を信頼することはできません。現代に生きる一般市民も指導者もことごとく不運で、精神的な知識に信念はなく、カリ時代に影響されています。さらに、さまざまな病気に絶えず苦しめられています。たとえば、いまでは結核患者や結核病院が多く見られますが、昔は社会環境がそれほどひどくなかったため、このような状況はありませんでした。不幸な現代人は、万民の利益のために努力するシュリーラ・ヴャーサデーヴァの代表者である超越主義者たちを喜んで迎えることはしません。もっとも素晴らしい博愛主義者とは、ヴャーサ、ナーラダ、マドゥヴァ、チャイタンニャ、ルーパ、サラスヴァティーたちの使命を人々に伝える超越主義者のことです。そのようなかれらは皆同じです。それぞれ別人ではあっても、堕落した魂たちを救い、ふるさとに、神のもとに導くという同一の使命を掲げた聖者たちなのです。

第１９節

चातुर्होत्रं कर्म शुद्धं प्रजानां वीक्ष्य वैदिकम् ।
व्यदधाद्यज्ञसन्तत्यै वेदमेकं चतुर्विधम् ॥ १९ ॥

チャートゥル・ホートゥランム　カルマ　シュッダハンム
cātur-hotraṁ karma śuddhaṁ

プラジャーナーンム　ヴィークッシャ　ヴァイディカンム
prajānāṁ vīkṣya vaidikam

ヴャダダハードゥ　ヤギャ・サンタテャイ
vyadadhād yajña-santatyai

ヴェーダンム　エーカンム　チャトゥル・ヴィダハンム
vedam ekaṁ catur-vidham

cātuḥ— 4 つの; *hotram*—儀式の火; *karma śuddham*—活動の浄化; *prajānām*—一般大衆の; *vīkṣya*—見た後; *vaidikam*—ヴェーダの儀式に従って; *vyadadhāt*—〜にした; *yajña*—儀式; *santatyai*—広めるために; *vedam ekam*— 1 つだけのヴェーダ; *catuḥ-vidham*— 4 つの分野に。

ヴャーサデーヴァは、ヴェーダで述べられている儀式の目的は、執行によって人々の職務を清めることにあると理解した。そしてその方法を簡素化するために、そして人々のあいだにそれらを広めるために、ヴェーダを 4 つの分野に分けた。

要旨解説

以前、ヴェーダはヤジュル・ヴェーダだけが存在し、そのなかに儀式に関する 4 区分が系統的に述べられていました。しかし、ヴェーダのその内容をもっとかんたんに実践できるように、そして 4 階級の人々が職務を浄化できるように、儀式に関する 4 部分に分けられました。リグ、ヤジュル、サーマ、アタルヴァという 4 つのヴェーダ以外に、各プラーナ、『マハーバーラタ』、各サムヒターなどがあり、それらは 5 番目のヴェーダと呼ばれています。シュリー・ヴャーサデーヴァやその多くの弟子たちは歴史上の人物であり、このカリ時代の堕落した魂たちに優しさと同情心をいだいていました。その思いから、 4 つのヴェーダの教えに関連している歴史的記述をもとにして、プラーナや『マハーバーラタ』が作られました。プラーナや『マハーバーラタ』をヴェーダと呼べるのかどうか、と疑いをはさむ余地はありません。『チャーンドーギャ・ウパニシャッド』（第 7 編・第 1 章・第 4 節）では、歴史として一般に知られているプラーナや『マハーバーラタ』は「5 番目のヴェーダ」として述べられているのです。シュリーラ・ジーヴァ・ゴースヴァーミーによれば、それが啓示経典のそれぞれの価値を確かめる方法です。

第２０節

ऋग्यजुःसामाथर्वाख्या वेदाश्चत्वार उद्धृताः ।
इतिहासपुराणं च पञ्चमो वेद उच्यते ॥ २० ॥

リグ・ヤジュフ・サーマータハルヴァーキャー
ṛg-yajuḥ-sāmātharvākhyā

ヴェーダーシュ　チャトゥヴァーラ　ウッドゥリターハ
vedāś catvāra uddhṛtāḥ

イティハーサ・プラーナム　チャ
itihāsa-purāṇaṁ ca

パンチャモー　ヴェーダ　ウッチャテー
pañcamo veda ucyate

ṛg-yajuḥ-sāma-atharva-ākhyāḥ— 4 つのヴェーダの名前; *vedāḥ*—ヴェーダ; *catvāraḥ*—4 つ; *uddhṛtāḥ*—別々の部分にされた; *itihāsa*—歴史上の記録（『マハーバーラタ』）; *purāṇam ca*—そして各プラーナ; *pañcamaḥ*— 5 番目; *vedaḥ*—知識の根源; *ucyate*—〜であると言われている。

根源の知識 [ヴェーダ] はそれぞれ 4 分野に分割された。しかし、各プラーナで述べられている歴史上の事実や信頼すべき史話は、第 5 のヴェーダと呼ばれている。

第２１節

तत्रर्ग्वेदधरः पैलः सामगो जैमिनिः कविः ।
वैशम्पायन एवैको निष्णातो यजुषामुत ॥ २१ ॥

タトゥラルグ・ヴェーダ・ダハラハ　パイラハ
tatrarg-veda-dharaḥ pailaḥ

サーマゴー　ジャイミニヒ　カヴィヒ
sāmago jaiminiḥ kaviḥ

ヴァイシャンパーヤナ　エーヴァイコー
vaiśampāyana evaiko

ニシュナートー　ヤジュシャーンム　ウタ
niṣṇāto yajuṣām uta

tatra—そこで; *ṛg-veda-dharaḥ*—リグ・ヴェーダの教師; *pailaḥ*—パイラという名のリシ; *sāma-gaḥ*—サーマ・ヴェーダのそれ; *jaiminiḥ*—ジャイミニという名のリシ; *kaviḥ*—高い質をそなえた; *vaiśampāyanaḥ*—ヴァイシャンパーヤナという名のリシ; *eva*—だけ; *ekaḥ*—一人; *niṣṇātaḥ*—熟知して; *yajuṣām*—ヤジュル・ヴェーダの; *uta*—讃えられた。

ヴェーダが４分野に分けられたあと、パイラ・リシがリグ・ヴェーダの、ジャイミニがサーマ・ヴェーダの教師になり、ヴァイシャンパーヤナだけがヤジュル・ヴェーダによって讃えられた。

要旨解説

各ヴェーダは、さまざまな方法で高められるよう博識な学者たちにゆだねられました。

第２２節

अथर्वाङ्गिरसामासीत्सुमन्तुर्दारुणो मुनिः ।
इतिहासपुराणानां पिता मे रोमहर्षणः ॥ २२ ॥

アタハルヴァーンギラサーンム　アーシートゥ
atharvāṅgirasām āsīt

スマントゥル　ダールノー　ムニヒ
sumantur dāruṇo muniḥ

イティハーサ・プラーナーナーンム
itihāsa-purāṇānāṁ

ピター　メー　ローマハルシャナハ
pitā me romaharṣaṇaḥ

atharva—アタルヴァ・ヴェーダ; *aṅgirasām*—アンギラー・リシに; *āsīt*—任された; *sumantuḥ*—またスマンタ・マヌとして知られた; *dāruṇaḥ*—アタルヴァ・ヴェーダに真剣に専念して; *muniḥ*—その聖者; *itihāsa-purāṇānām*—歴史上の記録と各プラーナ; *pitā*—父; *me*—私の; *romaharṣaṇaḥ*—ローマハルシャナ・リシ。

熱心に奉仕をしていたスマントゥ・マヌのアンギラーにアタルヴァ・ヴェーダが任された。そして私の父、ローマハルシャナが各プラーナや歴史上の記録を任された。

要旨解説

シュルティ・マントラでは、アタルヴァ・ヴェーダの原則に厳格に従っていたアンギラー・ムニがアタルヴァ・ヴェーダの従者の筆頭であることが述べられています。

第２３節

त एत ऋषयो वेदं स्वं स्वं व्यस्यन्ननेकधा।
शिष्यैः प्रशिष्यैस्तच्छिष्यैर्वेदास्ते शाखिनोऽभवन् ॥ २३ ॥

タ　エータ　リシャヨー　ヴェーダンム
ta eta ṛṣayo vedaṁ

スヴァンム　スヴァンム　ヴャッシャンー　アネーカダハー
svaṁ svaṁ vyasyann anekadhā

シッシャイヒ　プラシッシャイス　タチ・チッシャイル
śiṣyaiḥ praśiṣyais tac-chiṣyair

ヴェーダース　テー　シャーキヒノー　バハヴァン
vedās te śākhino 'bhavan

te—彼ら; *ete*—これらすべて; *ṛṣayaḥ*—博識な学者達; *vedam*—それぞれのヴェーダ; *svam svam*—自分達に託された物事において; *vyasyan*—渡す; *anekadhā*—多くの; *śiṣyaiḥ*—弟子達; *praśiṣyaiḥ*—孫弟子達; *tat-śiṣyaiḥ*—曾孫弟子; *vedāḥ te*—それぞれのヴェーダの従者達; *śākhinaḥ*—さまざまな支流; *abhavan*—そのようになった。

この博識な学者たちは、つぎに、自分たちに託された各ヴェーダを多くの弟子や孫弟子へ伝え、こうしてヴェーダの従者の各支流が形成されていった。

要旨解説

知識の根源はヴェーダです。ヴェーダの原文に属さない知識は、世俗的・超越的いずれでもありません。この世にある知識はすべて、最初のヴェーダがさまざまな支流に分かれた結果であり、最初は、高潔で博識な教授たちによって伝えられました。言いかえれば、ヴェーダの知識は、さまざまな師弟継承によって各支流に分かれ、世界各地に伝えられたということです。ですから、ヴェーダに無関係な知識を作りあげることはだれにもできません。

第２４節

त एव वेदा दुर्मेधैर्धार्यन्ते पुरुषैर्यथा ।
एवं चकार भगवान् व्यासः कृपणवत्सलः ॥ २४ ॥

タ　エーヴァ　ヴェーダー　ドゥルメーダハイル
ta eva vedā durmedhair

ダハーリャンテー　プルシャイル　ヤタハー
dhāryante puruṣair yathā

エーヴァンム　チャカーラ　バハガヴァーン
evaṁ cakāra bhagavān

ヴャーサハ　クリパナ・ヴァトゥサラハ
vyāsaḥ kṛpaṇa-vatsalaḥ

te—それ; *eva*—確かに; *vedāḥ*—知識の書物; *durmedhaiḥ*—知性の欠ける人々によって; *dhāryante*—会得できる; *puruṣaiḥ*—その人によって; *yathā*—～と同じほど; *evam*—このように; *cakāra*—編纂した; *bhagavān*—力強い; *vyāsaḥ*—偉大な聖者ヴャーサ; *kṛpaṇa-vatsalaḥ*—無知な大衆にひじょうに親切である。

こうして、無知な大衆にこのうえなく慈悲深い偉大な聖者ヴャーサデーヴァは、知性に欠ける人々が理解できるようにヴェーダをまとめたのである。

要旨解説

ヴェーダはもともと１つですが、それが多くの部分に分けられた理由がこの節で説明されています。すべての知識の根源であるヴェーダは、一般の人々がたやすく理解できる内容ではありません。ブラーフマナの資質を持たない人はヴェーダを学ぶべきではない、という訓戒があります。しかし、この訓戒がさまざまな意味でまちがって解釈されています。ブラーフマナの家系に生まれたから正式のブラーフマナである、と主張する人々は、ヴェーダの研究はブラーフマナ階級に限られる、と言います。いっぽう別の地位の人々は、「そのような意見は、ブラーフマナの家系に生まれなかった階級の人にとって不公平である」と考えます。しかし、じつは双方とも誤解しています。ヴェーダは、至高主がブラフマジーにでさえ説明しなくてはなりませんでした。ですから、ヴェーダは徳という特別な資質をそなえた人々によって理解されるべきものです。激性や無知にいる人々にヴェーダの主題は理解できません。ヴェーダ知識の究極目標は、人格主神シュリー・クリシュナです。シュリー・クリシュナは、激性や無知にいる

人々にはほとんど理解できません。サテャ・ユガの人々はすべて徳にいました。しかしその質はトゥレーター・ユガとドゥヴァーパラ・ユガの訪れとともに衰え、一般大衆は堕落していきました。いまでは徳はほとんど姿を消してしまったため、心優しく、そして精神的力みなぎるシュリーラ・ヴャーサデーヴァが、一般大衆のためにヴェーダをさまざまな支流に分けました。激性や無知にいる人々がヴェーダのさまざまな教えに従えるように、という配慮でした。そのことについて、次のシュローカが説明しています。

第２５節

स्त्रीशूद्रद्विजबन्धूनां त्रयी न श्रुतिगोचरा ।
कर्मश्रेयसि मूढानां श्रेय एवं भवेदिह ।
इति भारतमाख्यानं कृपया मुनिना कृतम् ॥ २५ ॥

ストゥリー・シュードゥラ・ドゥヴィジャバンドゥフゥーナーンム
strī-śūdra-dvijabandhūnāṁ

トゥライー　ナ　シュルティ・ゴーチャラー
trayī na śruti-gocarā

カルマ・シュレーヤシ　ムーダハーナーンム
karma-śreyasi mūḍhānāṁ

シュレーヤ　エーヴァンム　バハヴェードゥ　イハ
śreya evaṁ bhaved iha

イティ　バハーラタンム　アーキャーナンム
iti bhāratam ākhyānaṁ

クリパヤー　ムニナー　クリタンム
kṛpayā muninā kṛtam

strī—女性; *śūdra*—労働者階級; *dvija-bandhūnām*—再誕者の友人; *trayī*—３つの; *na*—ではない; *śruti-gocarā*—理解のために; *karma*—活動における; *śreyasi*—福利において; *mūḍhānām*—愚かな人々の; *śreyaḥ*—至上の恩恵; *evam*—こうして; *bhavet*—達成して; *iha*—このことで; *iti*—このように考えて; *bhāratam*—偉大な『マハーバーラタ』; *ākhyānam*—歴史的事実; *kṛpayā*—深い慈悲の心から; *muninā*—そのムニによって; *kṛtam*—編纂される。

哀れみの心を持つこの大聖者は、人々が人生の究極目標に到達できるよう、そうするのが賢

明であると考えた。ゆえに、女性、労働者、再誕者の友人たちのために、『マハーバーラタ』という偉大な史書を編纂したのである。

要旨解説

「再誕者の家系の友」とは、ブラーフマナ、クシャトリヤ、ヴァイシャ、あるいは精神的な教養にめぐまれた家系に生まれながらも、先祖と同じ資質をそなえていない人々を指します。このような子孫は、充分に浄化されていないために、その家系の一員としては認められません。浄化儀式は誕生するまえから始まり、種を与える浄化の儀式をガルバーダーナ・サムスカーラ（*Garbhādhāna-saṁskāra*）と言います。このガルバーダーナ・サムスカーラ（精神的家族計画）を受けていなければ、ほんとうの再誕者家系に生まれた者として認められません。ガルバーダーナ・サムスカーラには別の浄化手段もあり、そのなかには神聖な糸を授ける儀式があります。これは精神的な入門式のときにおこなわれます。このサムスカーラ（*saṁskāra*）を受けたあとに、再誕者の人物として正式に認められます。最初の誕生は種を与えるサムスカーラの時とされ、２番目の誕生が精神的入門式のときとされます。この重要なサムスカーラを経た人が正しい再誕者として認められることになります。

父と母が精神的な家族計画をたてずに、激情だけに駆られて子どもをもうけると、その子はドゥヴィジャ・バンドゥ（*dvija-bandhu*）と呼ばれます。このドゥヴィジャ・バンドゥは、もちろん正式な再誕者家族に生まれた子どもよりも知性の面で劣ります。ドゥヴィジャ・バンドゥは、知性の乏しいシュードラや女性に分類されます。シュードラと女性は、結婚式以外にサムスカーラの儀式を受ける必要はありません。

知性に欠ける人々、すなわち女性やシュードラ、また高い階級に生まれてもその質のない子どもたちは、超越的なヴェーダの目的を理解するために必要な資質がありません。そのようなかれらのために『マハーバーラタ』が用意されました。『マハーバーラタ』の目的はヴェーダの目的を実現させることにあり、その理由から、この本に『バガヴァッド・ギーター』というヴェーダの概説が含められました。知性に欠ける人々は哲学よりも物語に興味をしめすことから、『バガヴァッド・ギーター』という形でヴェーダの哲学が主シュリー・クリシュナによって語られました。ヴャーサデーヴァと主クリシュナは超越的な境地にいたため、現代の堕落した魂たちの幸福のために力を合わせました。『バガヴァッド・ギーター』はすべてのヴェーダ知識の真髄です。ウパニシャッドと同じように、精神的な価値を知るための最初の書物です。ヴェーダーンタ哲学は、精神的知識を充分に高めた人々のためにあります。知識を高めた精神的生徒だけが、主への精神的な献愛奉仕の生活に入ることができます。これは偉大な科学であり、その優れた教授は主

シュリー・チャイタンニャ・マハープラブという姿で現われた主自身です。そして、主から力をさずかった人々は、人々を主への超越的愛情奉仕に導くことができます。

第２６節

एवं प्रवृत्तस्य सदा भूतानां श्रेयसि द्विजाः ।
सर्वात्मकेनापि यदा नातुष्यद्धृदयं ततः ॥ २६ ॥

エーヴァンム　プラヴリッタッシャ　サダー
evaṁ pravṛttasya sadā

ブァーターナーンム　シュレーヤシ　ドゥヴィジャーハ
bhūtānāṁ śreyasi dvijāḥ

サルヴァートゥマケーナーピ　ヤダー
sarvātmakenāpi yadā

ナートゥッシャドゥ　ドゥリダヤンム　タタハ
nātuṣyad dhṛdayaṁ tataḥ

evam—このように; *pravṛttasya*—〜をしている者; *sadā*—いつも; *bhūtānām*—生命体達の; *śreyasi*—究極の善において; *dvijāḥ*—おお再誕者よ; *sarvātmakena api*—すべての方法によって; *yadā*—〜のとき; *na*—ではない; *atuṣyat*—満足する; *hṛdayam*—心; *tataḥ*—それに対して。

再誕のブラーフマナたちよ。それでもかれの心は満たされていなかった。万民の完全な平和のために力を尽くしたというのに。

要旨解説

シュリー・ヴャーサデーヴァは、一般大衆があらゆる面で幸せになれるようヴェーダ経典を用意したのですが、それでも心は満たされていませんでした。そのように尽力すれば満足できると思ったのですが、得た結果は違っていたのです。

第２７節

नातिप्रसीदद्धृदयः सरस्वत्यास्तटे शुचौ ।
वितर्कयन् विविक्तस्थ इदं चोवाच धर्मवित् ॥ २७ ॥

ナーティプラシーダドゥ　ドゥリダヤハ
nātiprasīdad dhṛdayaḥ

サラスヴァテャース　タテー　シュチャウ
sarasvatyās taṭe śucau

ヴィタルカヤン　ヴィヴィクタ・スタハ
vitarkayan vivikta-stha

イダンム　チョーヴァーチャ　ダハルマ・ヴィトゥ
idaṁ covāca dharma-vit

na—ではない; *atiprasīdat*—非常に満足して; *hṛdayaḥ*—心で; *sarasvatyāḥ*—サラスヴァティー川の; *taṭe*—〜の岸辺で; *śucau*—清められて; *vitarkayan*—考慮して; *vivikta-sthaḥ*—だれもいない場所で; *idam ca*—これも; *uvāca*—言った; *dharma-vit*—何が宗教かを知っている者。

このため、満たされない思いを感じた聖者はすぐに深い瞑想に入った。宗教の本質を知っていたからである。こうしてかれは自分に問いかけた。

要旨解説

聖者は、心の不満の原因を調べはじめました。心に満足感が得られなければ、完璧な境地に入ることはできません。心の満足は、物体を超えた境地に求めるべきものです。

第２８－２９節

धृतव्रतेन हि मया छन्दांसि गुरवोऽग्नयः ।
मानिता निर्व्यलीकेन गृहीतं चानुशासनम् ॥ २८ ॥
भारतव्यपदेशेन ह्याम्नायार्थश्च प्रदर्शितः ।
दृश्यते यत्र धर्मादि स्त्रीशूद्रादिभिरप्युत ॥ २९ ॥

ドゥリタ・ヴラテーナ　ヒ　マヤー
dhṛta-vratena hi mayā

チャンダーンムシ　グラヴォー　グナヤハ
chandāṁsi guravo 'gnayaḥ

マーニター　ニルヴャリーケーナ
mānitā nirvyalīkena

グリヒータンム　チャーヌシャーサナンム
gṛhītaṁ cānuśāsanam

バハーラタ・ヴャパデーシェーナ
bhārata-vyapadeśena

ヒ　アームナーヤールタハシュ　チャ　プラダルシタハ
hy āmnāyārthaś ca pradarśitaḥ

ドゥリッシャテー　ヤトゥラ　ダハルマーディ
dṛśyate yatra dharmādi

ストゥリー・シュードゥラーディビヒル　アピ　ウタ
strī-śūdrādibhir apy uta

dhṛta-vratena—厳格な規則の誓いのもとで; *hi*—確かに; *mayā*—私によって; *chandāṁsi*—ヴェーダ聖歌; *guravaḥ*—精神指導者; *agnayaḥ*—儀式の火; *mānitāḥ*—適切に崇拝した; *nirvyalīkena*—見せかけではなく; *gṛhītam ca*—受けいれもした; *anuśāsanam*—伝統的な規則; *bhārata*—『マハーバーラタ』; *vyapadeśena*—〜の編集によって; *hi*—確かに; *āmnāya-arthaḥ*—師弟継承の重要性; *ca*—そして; *pradarśitaḥ*—適切に説明した; *dṛśyate*—必要な物事によって; *yatra*—の場所; *dharma-ādiḥ*—宗教の道; *strī-śūdra-ādibhiḥ api*—女性、シュードラ、他の人々によってでさえ; *uta*—語られた。

私は、厳格な規律に従う誓いをたて、ヴェーダ、師、儀式の祭壇をつつましく崇拝した。また規則に従い、『マハーバーラタ』を説明しつつ師弟継承の重要性をしめし、そのことによって女性やシュードラ、他の人々（再誕者の友）でさえ宗教の道が理解できるようにした。

要旨解説

厳格な規則に従う誓いをたて、師弟継承に従わなければヴェーダの意味を理解することはできません。ヴェーダ、師、儀式の火は、完成を目指す人々によって崇拝されるべきものです。ヴェーダ知識がしめすこれらの複雑な主題は、女性・労働者・ブラーフマナ・クシャトリヤ・ヴァイシャの家系に誕生した無資格の人々が理解できるように、『マハーバーラタ』で系統的に説明されています。現代では、『マハーバーラタ』は根源のヴェーダよりも重要な意味をもつようになっています。

第３０節

तथापि बत मे दैह्यो ह्यात्मा चैवात्मना विभुः ।
असम्पन्न इवाभाति ब्रह्मवर्चस्यसत्तमः ॥ ३० ॥

タタハーピ　バタ　メー　ダイヒョー
tathāpi bata me daihyo

ヒ　アートゥマー　チャイヴァートゥマナー　ヴィブッフ
hy ātmā caivātmanā vibhuḥ

アサムパンナ　イヴァーバハーティ
asampanna ivābhāti

ブラフマ・ヴァルチャッシャ　サッタマハ
brahma-varcasya sattamaḥ

tathāpi—ではあるが; *bata*—欠陥; *me*—私のもの; *daihyaḥ*—体の中に位置して; *hi*—確かに; *ātmā*—生命体; *ca*—そして; *eva*—〜でさえも; *ātmanā*—自分自身lf; *vibhuḥ*—充分な; *asampannaḥ*—〜に欠けている; *iva ābhāti*—〜のように見える; *brahma-varcasya*—ベーダーンティスト達の; *sattamaḥ*—至高者。

私は、ヴェーダを理解するに必要な知識をすべて完全にそなえているが、満たされない思いも感じている。

要旨解説

シュリーラ・ヴャーサデーヴァが、ヴェーダによって達成できるすべての結果を詳細に知りつくしていることに疑いの余地はありません。物質に縛られている生命体の浄化は、ヴェーダがしめす活動に従うことで達成できますが、最終的に得られるものはそれぞれ異なります。その結果が達成されなければ、生命体がどれほどの知識をそなえていても、超越的かつ崇高な境地に入ることはできません。シュリーラ・ヴャーサデーヴァは、解決の糸口を見失ったかのように見えました。だから満足できなかったのです。

第３１節

किं वा भागवता धर्मा न प्रायेण निरूपिताः ।
प्रियाः परमहंसानां त एव ह्यच्युतप्रियाः ॥ ३१ ॥

キンム　ヴァー　バハーガヴァター　ダハルマ
kiṁ vā bhāgavatā dharma

ナ　プラーイェーナ　ニルーピターハ
na prāyeṇa nirūpitāḥ

プリヤーハ　パラマハンムサーナーンム
priyāḥ paramahaṁsānāṁ

タ　エーヴァ　ヒ　アチュタ・プリヤーハ
ta eva hy acyuta-priyāḥ

kim vā—あるいは; *bhāgavatāḥ dharmāḥ*—生命体達の献愛奉仕の活動; *na*—ではない; *prāyeṇa*—ほとんど; *nirūpitāḥ*—導かれて; *priyāḥ*—愛しい; *paramahaṁsānām*—完璧な生命体の; *te eva*—それもまた; *hi*—確かに; *acyuta*—完全無欠な方; *priyāḥ*—魅力的な。

これは、おそらく私が主への献愛奉仕について特筆していないからではないか。献愛奉仕こそ、完璧な生命体にも完全無欠の主にも尊いものなのに。

要旨解説

シュリーラ・ヴャーサデーヴァが感じた不満が、この節でかれ自身の言葉で表現されています。この感情は、主に献愛奉仕をしている生命体がふつうに感じるものです。奉仕をするという正常な状態に立脚していなければ、主も生命体も心から満足することはできません。ヴャーサデーヴァは、精神指導者であるナーラダ・ムニが訪れたときに自分の仕事の至らなさを痛感したのでした。そのことについて次のように述べられています。

第３２節

तस्यैवं खिलमात्मानं मन्यमानस्य खिद्यतः ।
कृष्णस्य नारदोऽभ्यागादाश्रमं प्रागुदाहृतम् ॥ ३२ ॥

タッシャイヴァンム　キヒランム　アートゥマーナンム
tasyaivaṁ khilam ātmānaṁ

マニャマーナッシャ　キヒデャタハ
manyamānasya khidyataḥ

クリシュナッシャ　ナーラドー　ビャーガードゥ
kṛṣṇasya nārado 'bhyāgād

アーシュラマンム　プラーグ　ウダーフリタンム
āśramaṁ prāg udāhṛtam

tasya—彼の; *evam*—このように; *khilam*—劣る; *ātmānam*—魂; *manyamānasya*—心の中で考えている; *khidyataḥ*—後悔している; *kṛṣṇasya*—クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ・ヴ

ャーサの; *nāradaḥ abhyāgāt*—ナーラダがそこに来た; *āśramam*—草庵; *prāk*—前に; *udāhṛtam*—言った。

先に述べられたように、クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ・ヴャーサが自分の至らなさを悔やんでいたとき、ナーラダが庵に現われた。

要旨解説

ヴャーサデーヴァが感じた空虚な思いは、知識不足が原因ではありません。バーガヴァタ・ダルマは主への純粋な献愛奉仕であり、一元論者はこの境地に近づくことはできません。一元論者はパラマハンサ（放棄階級の頂点の境地）には含まれません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、人格主神の超越的な活動の記述が満載された書物です。ヴャーサデーヴァは主に力を授けられた神聖な人物ではありますが、それまで著わした書物には主の超越的な活動について適切に説明しなかったため、満たされない思いを感じたのでした。その思いはシュリー・クリシュナからヴャーサデーヴァの心に直接そそがれ、その結果、このような虚無感を味わったのです。ここで明確にされているのは、主への超越的な愛情奉仕をしなければ、すべては空しく感じられるということです。しかし、主に崇高な奉仕をしていれば、果報的活動や経験哲学の推論に頼らなくても、すべてが明らかになっていきます。

第３３節

तमभिज्ञाय सहसा प्रत्युत्थायागतं मुनिः ।
पूजयामास विधिवन्नारदं सुरपूजितम् ॥ ३३ ॥

タンム　アビヒギャーヤ　サハサー
tam abhijñāya sahasā

プラテュッタハーヤーガタンム　ムニヒ
pratyutthāyāgataṁ muniḥ

プージャヤーンム　アーサ　ヴィデヒィヴァン
pūjayām āsa vidhivan

ナーラダンム　スラ・プージタンム
nāradaṁ sura-pūjitam

tam abhijñāya—彼の（ナーラダの）到着という幸運を目にして; *sahasā*—突然; *pratyutthāya*—立ち上がって; *āgatam*—〜に到着して; *muniḥ*—ヴャーサデーヴァ; *pūjayām*

āsa—崇拝する; *vidhi-vat*—ヴィディ（ブラフマー）に向ける同じ敬意で; *nāradam*—ナーラダに; *sura-pūjitam*—半神達によって崇拝される。

シュリー・ナーラダの吉兆な来訪をうけて、シュリー・ヴャーサデーヴァは立ちあがり、創造者・ブラフマジーに向けるのと同等の尊敬の念をこめて崇拝した。

要旨解説

この節の *vidhi*（ヴィデヒィ）は、最初に創造された生物であるブラフマーを指しています。ブラフマーはヴェーダの教授ですが、最初の生徒でもあります。シュリー・クリシュナからヴェーダを学び、最初にナーラダに教えたからです。つまり、ナーラダは精神的な師弟継承の２番目のアーチャーリャということになります。ナーラダ・ムニはブラフマーの代表者であることから、すべての *vidhi*（規定）の父親でもあります。同じように、継承上にいる他のすべての弟子も、根源の精神指導者の代表者として同等の敬意を受けなくてはなりません。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第１編・第４章、「ナーラダの出現」の要旨解説を終了します。